

オンライン講義概要

#立ち止まって考える



社会人間学

文学研究科・名誉教授／総合地球環境学研究所・特任教授

松田 素二

アフリカから学ぶ人文学

[全 2 回]

- | | | |
|-------|----------------------|--------------------------|
| 第 1 回 | 8/14 (土) 14:00~15:00 | 人類の未来に寄与するアフリカ社会の潜在力 |
| 第 2 回 | 8/21 (土) 14:00~15:00 | アフリカから学ぶもう一つの社会観、歴史観、人間観 |

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

アフリカから学ぶ人文学

【講義内容】

(第 1 回) 紛争や環境破壊、貧困や暴力など現代社会の直面する難題が集中的に生起しているアフリカ社会は、こうした難題を解決する叡智を作り出している社会です。このアフリカ社会の叡智を具体的に紹介します。

(第 2 回) 文字を持たず、奴隷交易や植民地支配の犠牲者だったアフリカ社会は、ヨーロッパによって無力で無知な存在として見下されてきました。そのアフリカ社会から歴史を見る見方、社会をみる視点、人間を考える視座を学ぶことで、もうひとつの人文学のあり方を学びます。

【講師プロフィール】

文学研究科・名誉教授／総合地球環境学研究所・特任教授 松田 素二

1979年、京都大学文学部卒業、ナイロビ大学大学院修士課程修了、京都大学博士（文学）。専門は社会人間学。著書に Urbanisation from Below (1998)、編著に改訂新版新書アフリカ史(2018), African Potentials Series vol.1-vol.7, Langa, Cameroon(2021).



倫理学

文学研究科・准教授

児玉 聡

8/15 (日) 11:00~12:00 パンデミックの倫理学 一年後…

[全 1回]

今般の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック(世界的大流行)は、日本を含めた世界中の国々で公衆衛生的危機をもたらした。感染症のパンデミックは、感染拡大による重症者や死亡者を生み出すだけでなく、パンデミックを阻止または収束させようとする保健・医療、科学・技術、および法・政策の対応が、医療資源配分の問題や差別・偏見の問題、また人権やプライバシーの制限の問題など、様々な倫理的問題をもたらす可能性がある。本講義では、昨年夏からの一年間を振り返る形で、パンデミックを倫理学の視点から一緒に考えていきたい。

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

パンデミックの倫理学一年後…

【講義内容】

今般の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミック(世界的大流行)は、日本を含めた世界中の国々で公衆衛生的危機をもたらした。感染症のパンデミックは、感染拡大による重症者や死亡者を生み出すだけでなく、パンデミックを阻止または収束させようとする保健・医療、科学・技術、および法・政策の対応が、医療資源配分の問題や差別・偏見の問題、また人権やプライバシーの制限の問題など、様々な倫理的問題をもたらす可能性がある。本講義では、昨年夏からの一年間を振り返る形で、パンデミックを倫理学の視点から一緒に考えていきたい。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・准教授 児玉 聡

専門は倫理学(とくに生命倫理学、近代の英米倫理思想史)。京都大学大学院文学研究科博士課程研修了(博士(文学))。近著に『実践・倫理学 現代の問題を考えるために』(勁草書房)があるほか、著書に『功利と直観』(勁草書房)、『功利主義入門』(ちくま新書)、『終の選択』(共著、勁草書房)、『正義論』(共著、法律文化社)などがある。



美学・芸術学

こころの未来研究センター・特定教授

吉岡 洋

8/22 (日) 14:00~15:00 〈わたし〉の外にある〈こころ〉について

[全 1回]

「心はどこにあるか？」と聞くと、昔なら胸の中、最近では脳と答える人が多いだろうが、いずれも「中」であることに違いはない。でも、本当にそうだろうか？ そもそも非空間的な存在である心を、何かの「中」に定位する必然性は、実はないのである。また〈私の心〉は〈私の心臓〉のように〈私〉に内属しているわけでもない。このことは芸術について考える時、特に重要となる。詩や絵に心があるとかないとか言うけれど、詩とは単なる言葉（記号）であり絵は単なる物体である。なぜ私たちはそれらについて〈心〉の存在を問題にするのか、ということを考えてみたい。

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

〈わたし〉の外にある〈こころ〉について

【講義内容】

「心はどこにあるか？」と聞くと、昔なら胸の中、最近では脳と答える人が多いだろうが、いずれも「中」であることに違いはない。でも、本当にそうだろうか？ そもそも非空間的な存在である心を、何かの「中」に定位する必然性は、実はないのである。また〈私の心〉は〈私の心臓〉のように〈私〉に内属しているわけでもない。このことは芸術について考える時、特に重要となる。詩や絵に心があるとかないとか言うけれど、詩とは単なる言葉（記号）であり絵は単なる物体である。なぜ私たちはそれらについて〈心〉の存在を問題にするのか、ということを考えてみたい。

【講師プロフィール】

京都大学こころの未来研究センター・特定教授 吉岡 洋

甲南大学、情報科学芸術大学院大学（IAMAS）教授を経て現職。専門は美学・メディア論。主な著書に、『情報と生命—脳・コンピュータ・宇宙』『〈思想〉の現在形—複雑系・電脳空間・アフォーダンス』、訳書に R.ローティ『哲学の脱構築—プラグマティズムの帰結』、H.フォスター『反美学』など。批評誌『ダイアテキスト』の編集や、『京都ビエンナーレ』、「岐阜おおがきビエンナーレ」等の企画、映像インスタレーション『BEACON』の制作にも関わってきた。



社会学

文学研究科・教授
落合 恵美子

Caring Society —新型コロナが露呈させたジェンダー問題とケアの危機を越えて

[全2回]

第1回	8/28 (土) 11:00~12:00	Caring Society —新型コロナが露呈させたジェンダー問題とケアの危機を越えて (前)
第2回	9/4 (日) 11:00~12:00	Caring Society —新型コロナが露呈させたジェンダー問題とケアの危機を越えて(後)

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

Caring Society —新型コロナが露呈させたジェンダー問題とケアの危機を越えて

【講義内容】

家庭内でも雇用の場でも、新型コロナは女性により大きな影響を及ぼしていることが世界的に明らかになっている。女性は「ひとのケアをする」役割を多く担っているから、「親密性の病」である新型コロナにより大きな打撃を受けたのである。ここから浮かびあがってきたのは、あらゆる場面でケアが見えない、あるいは軽視されているという、私たちの社会がコロナ以前から抱える構造的な問題だった。「ひとが生きること」とそれを支える活動としての「ケア」を正当に位置づける社会的再生産の仕組みをコロナ後のニューノーマルとして提案したい。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 落合 恵美子

京都大学アジア研究教育ユニット長、アジア親密圏/公共圏教育研究センター長。専門分野はジェンダー、家族、人口の歴史の変容と国際比較。著書・編著書に、『21世紀家族へ(第4版)』(有斐閣、2019)、Asian Families and Intimacies, 4 vols. (co-editorship, Sage, 2021)など。The Intimate and the Public in Asian and Global Perspectives (Brill)のシリーズ編者を務める。



哲学

文学研究科・教授

出口 康夫

「できること」から「できなさ」へ：アフターコロナの人間観 [全4回]

第1回	8/28 (土) 14:00~15:00	「われわれとしての自己」再訪
第2回	9/11 (土) 14:00~15:00	「できること」から「できなさ」へ I
第3回	9/18 (土) 14:00~15:00	「できること」から「できなさ」へ II
第4回	9/25 (土) 14:00~15:00	「できなさ」を基軸とする社会へ

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

Season3

【講義タイトル】

「できること」から「できなさ」へ：アフターコロナの人間観

【講義内容】

シーズン1でお話しした「われわれとしての自己」を踏まえつつ、この講義では「われわれ」を構成する一エージェントとしての「わたし」に焦点を当て、その本質・尊厳・かけがえのなさを「できること(capability)」ではなく、むしろ「できなさ (incapability)」と捉え直すことを試みます。その上で、この「できなさ」を主軸とする人間観をベースに、来るべきアフター/ウィズ・コロナ社会の青写真を描きたいと思います。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・教授 出口 康夫

1962年、大阪市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。人社未来形発信 ユニット・ユニット長、応用哲学倫理学教育研究センター・センター長、副プロボスト（理事補）。専門は数理哲学、分析アジア哲学。近著に *What Can't Be Said: Paradoxes in East Asian Thoughts* (Oxford UP 2021、共著)。現在、*Self & Contradiction: Toward a Philosophical Reactivation of East Asian True Self* を執筆中。



観光・マーケティング

経営管理大学院・教授

若林 靖永

アフターコロナの観光：京都観光を中心に

[全 3回]

第1回	8/29 (日) 11:00~12:00	コロナ禍の京都観光はどうなっているか
第2回	9/12 (日) 11:00~12:00	京都観光の過去をどうみるか
第3回	9/19 (日) 11:00~12:00	未来の京都観光をどう描くか

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

アフターコロナの観光：京都観光を中心に

【講義内容】

現代社会において観光はその社会的価値を高めており、国家戦略・産業戦略・都市/地域戦略として観光政策が推進されている。特に近年はインバウンド観光客の急拡大、それにとまなう「オーバーツーリズム」問題が国内外で課題となっていた。そこにコロナによってインバウンド観光客ゼロという異常事態に遭遇し、観光地・観光産業は大打撃を受けている。これからの観光はどうなっていくのか、観光政策と観光事業者の経営の、過去・現在・未来について、京都観光を中心にいっしょに考えていきたい。

【講師プロフィール】

京都大学経営管理大学院・教授 若林 靖永

京都大学経営管理大学院経営研究センター長・教授、京都大学大学院経済学研究科教授 京都大学経営管理大学院 (MBA) では、マーケティング、クリティカルシンキングなどの授業科目を開講し、ビジネスリーダーシッププログラム、観光 MBA コースを担当する。京都市観光振興審議会会長 (2020 年度) として、新たな京都市観光振興計画策定に取り組む。ほかに、京都市伝統産業活性化推進審議会会長、京都市商業アドバイザー会議議長、京都府消費生活審議会委員、CIEC (コンピュータ利用教育学会) 会長、NPO 教育のための TOC 日本支部理事長など。



臨床心理学

こころの未来研究センター・特定講師

畑中 千紘

©竹中裕彦

8/29 (日) 14:00~15:00 臨床心理学からみたこころの現在と未来

[全 1回]

時代によってこころの性質は移り変わってきた。臨床心理学は、心理療法の実践をもとに研究を進める学問であるが、その中でも近年では主体性の弱まりや、ネガティブな体験に触れたり、抱えたりすることの難しさが指摘されるようになっている。本講義では、いくつかの研究をとりあげながら現代社会を生きる人のこころの傾向について議論し、それに対するひとつのアプローチとしてSNSを用いた心理相談についても紹介する。そして、まさに今、時流の中で注目されているコロナ禍におけるこころの反応についてもSNS相談の実証研究のデータをもとに考えてみたい。

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

臨床心理学からみたこころの現在と未来

【講義内容】

時代によってこころの性質は移り変わってきた。臨床心理学は、心理療法の実践をもとに研究を進める学問であるが、その中でも近年では主体性の弱まりや、ネガティブな体験に触れたり、抱えたりすることの難しさが指摘されるようになっている。本講義では、いくつかの研究をとりあげながら現代社会を生きる人のこころの傾向について議論し、それに対するひとつのアプローチとして SNS を用いた心理相談についても紹介する。そして、まさに今、時流の中で注目されているコロナ禍におけるこころの反応についても SNS 相談の実証研究のデータをもとに考えてみたい。

【講師プロフィール】

京都大学こころの未来研究センター・特定教授 吉岡 洋

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学後、京都大学こころの未来研究センター特定研究員、同センター特定助教を経て現職。専門は臨床心理学。主な著書に『話の聴き方からみた軽度発達障害』、『発達障害への心理療法的アプローチ』（共著）。『大人の発達障害の見立てと心理療法』（共著）、『発達の非定型化と心理療法』（共著）、『SNS カウンセリング・ハンドブック』（共著）『SNS カウンセリング・ケースブック:事例で学ぶ支援の方法』（共著）など。



社会学

文学研究科・名誉教授/京都産業大学現代社会学部客員教授

伊藤 公雄

「コロナ」が露わにした現代社会

[全 2 回]

第 1 回	9/5 (日)	11:00~12:00	「コロナ」と日本社会の脆弱性
第 2 回	9/11 (土)	11:00~12:00	日本ゆっくり党宣言～ポスト「コロナ」の日本社会をめざして～

京都大学オンライン公開講義

「立ち止まって、考える。」

」 Season3

【講義タイトル】

「コロナ」が露わにした現代社会

【講義内容】

2020 年初頭から猖獗をきわめた新型コロナウイルスは、現代世界の脆弱性を露わにさせた。特に日本社会においては、政府の対応のミスも含めて、行政組織の機能不全、医療問題、デジタル化の遅れなどさまざまな問題が顕出することになった。今回の「コロナ」を通して見えてきたのは、1990 年代以後停滞してきた日本社会の混迷する姿だったのではないだろうか。今回は、社会学の観点から、現代日本社会のかかえている「病巣」を探り、今後ますます深化する少子高齢の日本社会のなかで、どのようなポスト「コロナ」が構想できるのかについて考えてみたい。

【講師プロフィール】

文学研究科・名誉教授/京都産業大学現代社会学部客員教授 伊藤 公雄

1951 年生まれ。京都大学文学部・同大学院博士課程で社会学専攻。その後、イタリア政府給費留学生としてミラノ大学政治学部留学。大阪大学人間科学部助教授・教授、京都大学院文学研究科・文学部教授などを経て、現在、京都産業大学現代社会学部客員教授・ダイバーシティ推進室長、京都大学・大阪大学名誉教授。第 23-4 期日本学術会議会員、国立女性教育会館監事など。著書に『光の帝国・迷宮の革命』（青弓社）、『「戦後」という意味空間』などがある。



©竹中稔彦

認知科学・文化心理学

こころの未来研究センター・特定助教

中山 真孝

9/5 (日) 14:00~15:00 「こころを動かされること」についての研究とその方法 [全 1回]

「こころが動かされた」という時、それは一時的な気持ちの動きが感じられるだけでなく、価値観・人生観といった世界に対する見方そのものが動かされる。このような時に生じる感情は、感動や畏怖・畏敬感情として近年研究の拡がりをみせている。感動・畏怖・畏敬が個人や社会にとってどのような機能があるかについての一連の研究を紹介するとともに、そこで用いられている科学的手法も合わせて紹介する。また、これら研究の紹介を通して人文社会科学的な問題意識や題材を科学的な方法で検討するという人文社会科学の未来形についても考えたい。

【講義タイトル】

「こころを動かされること」についての研究とその方法

【講義内容】

「こころが動かされた」という時、それは一時的な気持ちの動きが感じられるだけでなく、価値観・人生観といった世界に対する見方そのものが動かされる。このような時に生じる感情は、感動や畏怖・畏敬感情として近年研究の拡がりをみせている。感動・畏怖・畏敬が個人や社会にとってどのような機能があるかについての一連の研究を紹介するとともに、そこで用いられている科学的手法も合わせて紹介する。また、これら研究の紹介を通して人文社会科学的な問題意識や題材を科学的な方法で検討するという人文社会科学の未来形についても考えたい。

【講師プロフィール】

京都大学こころの未来研究センター・特定助教 中山 真孝

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学、博士（教育学）。京都大学こころの未来研究センター研究員、カーネギーメロン大学客員博士研究員/日本学術振興会海外特別研究員を経て現職。専門は認知科学・文化心理学。主な論文に「Position-element frequency learning is dissociable from Hebb repetition learning」、「Individual and cultural differences in predispositions to feel positive and negative aspects of awe」、「Awe と意味生成」など。



現代社会論・社会思想

こころの未来研究センター・特定教授

佐伯 啓思

9/12 (日) 14:00~15:00 日本近代化と日本人の『こころ』

[全 1回]

明治以降の日本の近代化は急激な「西洋化」でもあった。西洋へのキャッチアップ政策は、一方で日本を西洋と並ぶ文明国に仕立てると同時に、他方で、日本人の精神（こころ）の喪失という感覚をももたらすことになった。それは、しばしば「和魂洋才」などといわれるが、話はそれほど簡単ではない。この近代日本のディレンマを、異なった世代に属する福沢諭吉と夏目漱石を中心に振り返ることで、「日本人のこころ」とは何かを考えてみたい。また、その問題の「今日的意義」についても論じてみたい。

【講義タイトル】

日本の近代化と日本人の『こころ』

【講義内容】

明治以降の日本の近代化は急激な「西洋化」でもあった。西洋へのキャッチアップ政策は、一方で日本を西洋と並ぶ文明国に仕立てると同時に、他方で、日本人の精神（こころ）の喪失という感覚をももたらすことになった。それは、しばしば「和魂洋才」などといわれるが、話はそれほど簡単ではない。この近代日本のディレンマを、異なった世代に属する福沢諭吉と夏目漱石を中心に振り返ることで、「日本人のこころ」とは何かを考えてみたい。また、その問題の「今日的意義」についても論じてみたい。

【講師プロフィール】

京都大学こころの未来研究センター・特定教授 佐伯 啓思

1979年、東京大学経済学博士課程退学後、滋賀大学等をへて1993年より京都大学大学院人間・環境学研究科教授、2016年に退官後、京都大学名誉教授およびこころの未来研究センター特任教授。専攻は、政治、経済を中心とする現代社会論、社会思想。



科学哲学

文学研究科・准教授
伊勢田 哲治



理学研究科・教授
嶺重 慎

9/18 (土) 11:00~12:00 [対談] ブラックホールと哲学

[全1回]

自然科学は19世紀頃までは哲学の一分野とみなされていましたがその後わかれていきました。哲学には、世界は基本的にどうなっているのか、世界についてわれわれはいかにして、何を知ることができるのかといった原理的な問題が残されました。しかし、科学の最先端の領域では、そうした原理的な問題がまた頭をもたげてくることもあります。今回の対談ではブラックホールの研究者と科学哲学の研究者の対談という形で、科学と哲学の接点をさぐっていききたいと思います。

【講義タイトル】

[対談] ブラックホールと哲学

【講義内容】

自然科学は19世紀頃までは哲学の一分野とみなされていましたがその後わかれていきました。哲学には、世界は基本的にどうなっているのか、世界についてわれわれはいかにして、何を知ることができるのかといった原理的な問題が残されました。しかし、科学の最先端の領域では、そうした原理的な問題がまた頭をもたげてくることもあります。今回の対談ではブラックホールの研究者と科学哲学の研究者の対談という形で、科学と哲学の接点をさぐっていききたいと思います。

【講師プロフィール】

京都大学文学研究科・准教授 伊勢田哲治

1968年福岡生まれ。1991年京都大学卒業、2001年米国メリーランド大学 Ph.D.(philosophy)。1999年より名古屋大学情報文化学部講師、その後同大学大学院情報科学研究科准教授などを経て2008年より現職。著書に『疑似科学と科学の哲学』(名古屋大学出版会、2003年)、『哲学思考トレーニング』(ちくま新書、2005年)、『科学技術をよく考える』(共編著、名古屋大学出版会、2013年)など。

京都大学理学研究科・教授 嶺重慎

神戸市出身 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、理学博士。マックスプランク研究所、ケンブリッジ大学研究員等を経て2008年より現職。京都大学宇宙総合学研究ユニット長を兼任。専門はブラックホール天文学。専門研究のかたわら、市民向け講演、一般書執筆、バリアフリー天文教材開発に励む。主な著書に『ブラックホール天文学』(日本評論社、2016年)『もっと! 京大変人講座』(三笠書房、2020年)など。



仏教学・チベット学・ブータン学

こころの未来研究センター・准教授

熊谷 誠慈

9/19 (日) 14:00~15:00 仏教哲学にもとづく「こころ」の概念と「良きこころ」のありかた [全 1回]

科学技術が発展し、人類は物質的な豊かさを享受できるようになったが、その一方で、こころの問題が置き去りにされている。新型コロナウイルスは、罹患者の身体のみならず、経済、社会、そして人々のこころをも蝕んでしまう恐ろしさを持っていることが分かった。こころの問題なくして人類の幸福はないであろう。本講義では、仏教という「こころ」を重視する伝統知に着目する。仏教は「東洋の心理学」とも呼ばれるように、こころの分析を通じた善き生き方を提示してきた。仏教的観点から「こころ」はどのように捉えられるのか。また新型コロナウイルスなど、様々な危機とどう対峙していけばよいのか。本講義では、仏教的視点からこころの問題を再検討する。

【講義タイトル】

仏教哲学にもとづく「こころ」の概念と「良きこころ」のありかた

【講義内容】

科学技術が発展し、人類は物質的な豊かさを享受できるようになったが、その一方で、こころの問題が置き去りにされている。新型コロナウイルスは、罹患者の身体のみならず、経済、社会、そして人々のこころをも蝕んでしまう恐ろしさを持っていることが分かった。こころの問題なくして人類の幸福はないであろう。本講義では、仏教という「こころ」を重視する伝統知に着目する。仏教は「東洋の心理学」とも呼ばれるように、こころの分析を通じた善き生き方を提示してきた。仏教的観点から「こころ」はどのように捉えられるのか。また新型コロナウイルスなど、様々な危機とどう対峙していけばよいのか。本講義では、仏教的視点からこころの問題を再検討する。

【講師プロフィール】

京都大学こころの未来研究センター・准教授 熊谷 誠慈

1980年広島市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。京都大学白眉センター特定助教、京都大学こころの未来研究センター特定准教授を経て、現職。2018年、ウィーン大学ヌマタ教授兼任。専門は仏教哲学（インド・チベット・ブータン）およびボン教研究。主要著書に The Two Truths in Bon (Kathmandu: Vajra Publications, 2011)、Bhutanese Buddhism and Its Culture (編著, Kathmandu: Vajra Publications, 2014)、『ブータン：国民の幸せをめざす王国』（創元社、2017年）など。